



まちてくギャラリー 32

小さな商店街、てくてく歩かされるギャラリー
2020年2月～4月の展示



contents

danCin cloud ぼる雲

芸術家というもの

高杉隆
労働の価値

出町隼人
暗喩の明喩

空言のようなホントの話3
水戸の春はホロ苦い

第2回「アート@つちざわ〈土澤〉
@つちざわ 抄

木瀬 公二

菅沼 緑

菅沼 緑

萬木 康博

岡部 昌生

〈未来〉高杉 隆



「まちてくギャラリー」#32
2020年2月～4月の展示

作品写真提供 高杉 隆・出町 隼人

展示場所 花巻市東和町土沢商店街 24ヶ所
発行 東和町土沢商店街商店会連絡会

企画編集 tonccaci atelier
花巻市東和町田瀬 14 - 120
菅沼 緑 roqu@me.com 090-9154-5748

《二つではなく一つでもない》出町 隼人



前回、31号の「後記」に意気がって、発行回数も減らさないと、見栄を切りました。実情は、それを許さない私自身の身辺で、この号で休刊とします。身の程知らずが舌の根も乾かぬうちに、前言を翻します。

しかし、「まちてくギャラリー」の展示は続けるつもりです。ここに上げた写真は、⑨キクヤのウインドーです。大看板の他にこうしたショーウインドーでの展示もやっていきたいと思えます。

こうした写真による、展示の数は25ヶ所になります。しかし、小さな展示では、車で通り過ぎれば、全く目にも、はいりもしないでしょう。このまちには、他に萬鉄五郎記念美術館の展覧会のポスターが、ほとんどの商店の窓や壁に貼られていて、そうした展示が溢れている、ともいえます。

そうしたことが日常になっています。

大きなインパクトはなくても、いつでもそこにあるということの強さは必ずどこかに、影響が出てくるはずだ、とおもいます。

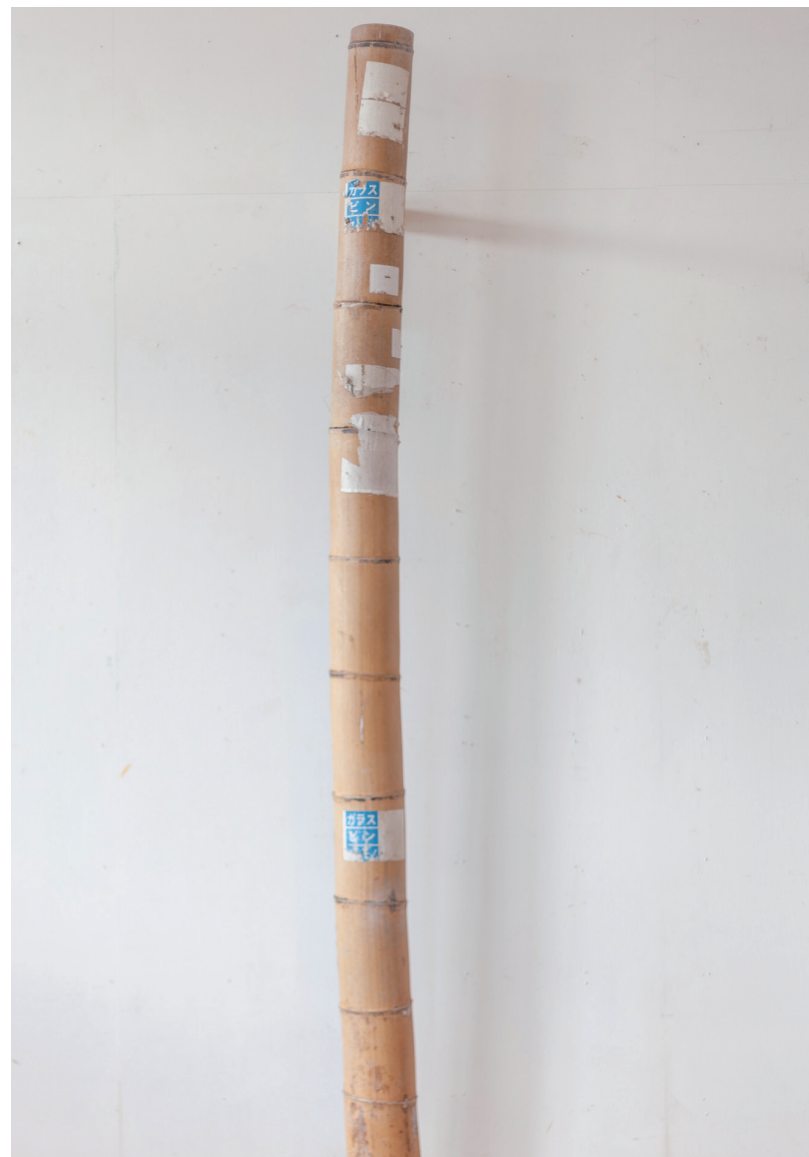
芸術家というもの

木瀬 公二

塚本誠二郎という陶芸家がいる。75歳になったと思う。静岡県伊豆半島最南端の南伊豆町の山の中で暮らしている。東京芸大陶芸専攻科を終了した4年後の1975年、一家で移住してきた。温暖の地のそこに窯を築いたのは、粘土が凍らないという理由だった。実はもう一つ。山に入れば一年中、草が生え木の実がなり、飢えることはないだろうと思ったことだ。

家は自分で建てた。木造二階建て。靴を脱いで家に入った記憶がないので、一階の床は三和土だった気がする。台所に、自作の木製テーブルとイスが置かれ、そこが居間も一部ギャラリーも兼ねていた。住居は2階で、台所の天井の一部が外れ、下りてきたロープに食べ物などを入れたかごを縛り、引っ張り上げて暮らしていた。冷蔵庫は自分で気に入るように色を塗り直し、掛け時計も文字盤をつくりかえていた。

トイレは外にあった。天井はなかった。雨の日は傘をさして行き、傘を持ったまま用を足した。そのそばに、畑を作っていた。都会育ちの夫婦が、見よう見まねで百姓に挑戦したのは、身近で食料を確保するためだ。そこに、白い小さな花が咲き乱れていたことがあった。ダイ



宅配便で届いた長さ約2メートルの竹筒。中の節はくり抜かれ、自然薯が入っていた



2000年に、朝日陶芸展でグランプリをとった野田村の泉田之也さんだ。受賞の取材に窯に行ったとき、並んでいるいくつかの作品を見て、塚本さんを思い出した。そのことをそのまま伝えると、泉田さんが「塚本さんに会ったことはないけど、私が大きな影響を受けた人です」と答えた。加守田章二が塚本誠二郎につながり、塚本誠二郎が泉田之也さんにつながっていた。そういう、魂の流れのようなものを、嬉しく思った。

塚本宅の近所に、真壁泉という画家がいた。画家を指したが挫折した、と言った方が正確かも知れない。隣接する下田市に家があったが、独り者の彼はわざわざ山の中にテントを張って暮らしていた。電気は通じておらず、脇の小川から水を汲み、竪穴式住居のように地面に穴を掘り、煮炊きしていた。塚本さんと似た年回りだった。

チョウナで削った木材で、いすやテーブルづくりも手掛けていたが、食うのは大変だった。テントで学習塾をすることにした。生徒は集まったが、その暮らしぶりに興味が集まり、勉強ははかどらなかつた。電話がないの



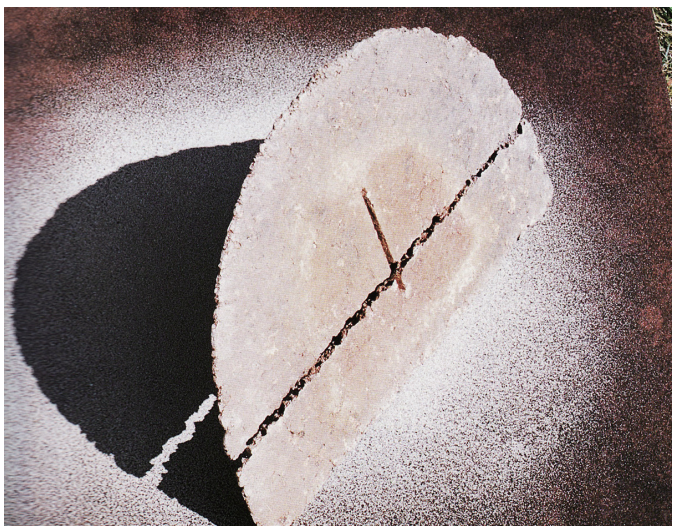
写真は塚本誠次郎作品集「陶」より。以下P5,7,8,10も

コンの花だった。「可愛いでしょ」と奥さんは言った。ダイコンは、花が咲くころまで収穫しないでおく売り物にならない。だから専業農家が珍しがって見に来て「ダイコンの花畑を初めて見た」と言われていた。干して保存しようという気はなし。あるがまま。花が実になったとき、その油いためをいただいたことがあるが、おいしかった。

地元の土で、作品を作っていた。オブジェが多かった。焼き締めた土が生み出すそれは、存在感があった。見る人に緊張感を与え、背筋を伸ばさせる。宇宙の広がりも感じさせ、吸い寄せられた目が離れなくなる。

好きな陶芸家は加守田章二だと言った。若いころ、加守田が窯を築いていた岩手県遠野市まで会いに来たことがあると言った。のちに加守田の作品集を見た私は、確かに影響を受けているように感じた。

作品展は、一年に一度やる程度だ。公募展に出したこともなかった。金銭にも名誉にも欲はなかった。だから、知名度が高いとは思えなかつた。しかし20年前、よく知っているという人と、岩手県で会った。



自宅にある塚本さんの茶碗

で、日程を変更するときは自転車に乗って一軒一軒伝え歩いた。誠実な教え方だったと思うが、電気が通じていないのが致命的になった。生徒の成績は上がっても、薄暗い教室に視力がどんどん落ちて行き、やがて一人の生徒もいなくなった。

どうやって暮らしているのだろうかと周りには不思議がるが、本人は平気な顔をしていた。骨とう品が好きだったが、それで商売をしたことはなかった。才覚のなさ、人の好きが周りから愛されていたゆえんだ。暮らせていたのは、そのあたりだと思う。

南伊豆町は、海と山がくっついている。切り立った崖の前に、海原が広がる。春になるとその山にヤマザクラが咲き誇る。そのころ、ウグイスの谷渡りが始まる。何度か花見をした。それをいつにするかの判断に、真壁さんはうるさかった。ヤマザクラは、葉が芽を出すのと花が咲き始めるのがほぼ同時だ。緑淡い中にピンクが広がり、海の青とのコントラストが、あでやかさを増す。開花状況や気候からベストの日を予想する。その日までに一番いい花見場所を探すため、山に入る。ヤマザクラと

海とウグイスの鳴き声を頭に入れ、小枝を切って進む。ナタはいつも、腰にさしている。よしこだ、という場所が見つかる。周囲の刈り込みをし、広場をつくる。あとは、花のつぼみのふくらみむのを待つ。「明後日はよさそうです」と、仲間の家を自転車まで回って伝える。

初めて招かれた年に、腰を抜かささんばかりに驚いた。藪の中を進み、広場に着くと、赤い毛氈が敷かれていたのだ。その上に、茶道具が整えられていた。別世界だった。風炉釜が置かれたそこで一服。今に至るまで、最高の茶席だった。重箱も置かれ、その場で竹を切って箸をつくり、盃も作った。贅沢を超えた花見になった。

真壁さんに画材を納入していたのは、稲葉岩男さんだ。下田市の須崎御用邸近くに店を構えていた。70歳にはなっていない。自分でも絵を描くが、画材の納入先の画家たちから、才能を認めてもらったことはない。一度、地元のリゾートホテルで個展をしたときは、師匠と慕う日本画家から「波の下が何も描かれていないじゃないか」と怒られていた。海原の中に、波を受ける岩を描いたその絵を見ての、師匠の叱責だ。「海面から上の、見える



部分を描いただけじゃないか」という指摘だった。絵心のない私は、ただ感心して聞いていた。その指摘が影響

したかわからないが、それからほどなく画家は廃業して画材屋に専念した。だが、顧客がそれほどいるわけではなかった。アルバイトをしなければ生きていけなかった。

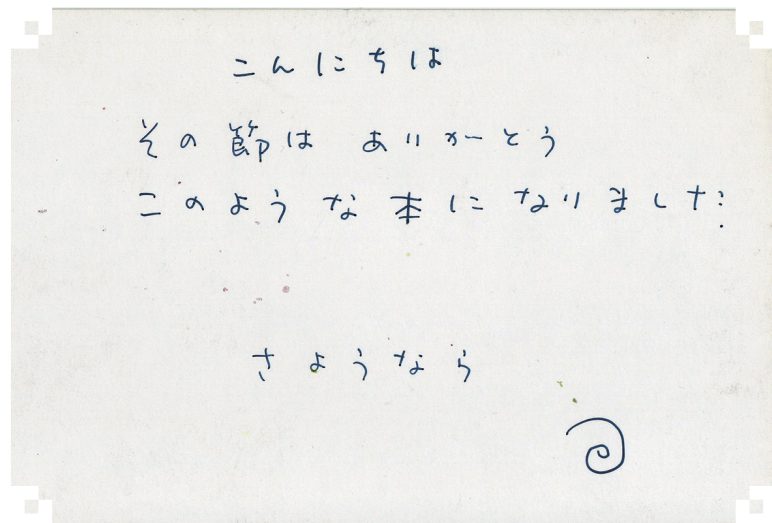
自宅からは下田湾が一望できる。花火大会の時にお招きに預かり、彼が潜ってとってきた貝類などをごちそうになりながら酒を飲んだ。手入れの行き届いた庭には、山野草がほどよく配されていた。その繊細さは、家の中に入ると見事に消え失せる。散らかし放題である。他人にはアンバランスに写るという暮らしを、本人はいいと思い貫いていたのだと思う。そんな独特な美意識を、数年前に思い出させてもらった。

遠野市に移住してきた私の元に、長い竹筒が郵便物として届いた。長さは2倍ほどあった。送り主を見ると、稲葉さんだった。遠野は、孟宗竹の北限を超えているから、という話を思い出して、わざわざ竹筒を贈ってくれたのかと思ったら、タテに二つに割れていた。ぱかっとなされたその中から、自然薯が出てきた。わざわざ節を抜

き、自然薯が折れないようにと送ってきてくれたのだ。た。

そういえば、塚本さんや真壁さんらの酒飲みで、自然薯掘りが話題になったことがあった。どれだけ長いものを折らずに掘り出せるかが自慢なのだ、とみんなの意見は一致した。折らずに長く掘りだすだけなら、周りの土を広く掻き出せばいい。それは邪道で、掘り出した穴の直径の狭さが重要なのだと、誰かが言った。そこに、稲葉さんの師匠の老画家が加わった。「あれは秋深まるとツルが切れる。木の枝先に絡まっているツルをまず探す。その切れた先は、地表のどこからどう枝を伸ばしここに巻き付いたのかと推測する。その逆をたどっていき、自然薯の埋まっている場所を見つけるのが、最上の掘り師なのだ」といった講釈が飛び交って場が盛り上がった。竹筒郵便は、狭い直径でこんなに長い自然薯を掘ったのだぞ、という稲葉さんの自慢も一緒に入っていたものだった。

こんな集まりを、たまにやっていた。我が家でやった時も、前出のメンバーらが集まっていた。良寛の「風」



塚本さんからの葉書、うず巻きは塚本さんのシンボルマーク



という書が議論のテーマになった。あの字は、遅筆か速筆かの論争である。「ゆっくり書かなければあの線は出せない」「いや素早く書いてこそその線である」と、皆が持論を展開する。私は、考えたこともないそんなことを話題に、いつまでも口角泡を飛ばし続ける人種に、目を丸くしていた。同時に、そういうことができる人たちに感激した。

こういう場に出される器類に、参加者たちは興味を持つ。これはいい。珍しいものだね、と話が弾む。ところが我が家には、そのような凝った器はない。そこら辺の、ありきたりの食器を並べていた。だれも、食器を話題にしない。

せっかくごちそうになって、何も褒めないのは失礼にあたる、とでも思ったのか、塚本さんが「これはいいね」とほめた。子供が空けたふすまの穴を、女房が梅の花形に切った和紙でふさいだ跡だった。

そういう人に囲まれていると、ひたすらアリの歩く姿を見ていた熊谷守一という画家は、特異な人ではないと思えた。40年も前に会った工藤哲巳という美術家は、パ

フォーマンスをやると言って、会場の一番後ろに姿を現し、そこからゆっくりゆっくりと1時間以上もかけて舞台にたどり着いて、「はい終わり」と舞台を去った。まったく芸術家というやつは、と思わずにはいられない。

年齢を重ね、ただただ目的に向かって走る暮らしに疑問を感じ出したところから、こういう人たちが生きていけない世界は恐ろしいだろうな、と思い出した。そしていま、AIが地上を席巻し出して、どんどんそんな方向に地球が回りだしている気がする。

(きせこうじ 元朝日新聞盛岡総局長)



〈スーパーカウ〉2019年 油彩・木製パネル 126×162cm





〈未来〉2014年 油彩、キャンパス、和紙 130×97cm

高杉さんとは同じ岩手県の住人でありながら、それほどは、会って話を交わしたわけではありません。だけど、作品を見た時、イメージについて懐疑的で、疑問を抱えている人なのではないかという印象をもっていました。先日、盛岡のギャラリー彩園子で、久しぶりの個展があったので、見てきました。

話しもしましたが、わたしも話しを訊きだすのが下手で、満足するくらいの会話にならなかったのです。

そして、彼の持っている絵画感つまり、イメージ感についても側面から手探りで、なんとなく触れるといった感じでしかありませんでした。それでも、やっぱりそうなんだろう、と思いを強めながら帰ってきたのです。

人がなにかをするにあたって、イメージっていうのが一番最初の透明な壁のような気がしているのですが、ふしぎな作用だと思います。

例えば、私たちは夢を見ます。でも、夢を見ている時間というのは、ほんの一瞬のことで、見た夢の時間とはまったく違っている、ということを読んだことがあります。

それこそ夢は、一瞬のイメージのひらめきであって、実体のない映像の体験なのでしょう。いつでも、なにかを想像するときには、頭の中のシミュレーションのように、架空の体験を演じているのだと思います。その架空を元にして、思考が始まり、行動することで実態へとつながります。

いつてみれば、その当たり前のような、日常の行動のパターンですら、空想とシミュレーションから始まっているので、それはあまりにも日常的な連鎖でもあります。普通のことなので気にも留められない、人の想像の根幹だともいえるのではないのでしょうか。

話が、根源に近づいてしまい、「イメージ」という不思議な作用の膨大な問題が、焦点を結びません。

絵というものが、最初、「あるイメージ」から出発するとします。でもそれは、「ある」なのです。

ああ、うまくことがむすべません。

抽象に片寄り、具体の取っ掛かりをつかむことができませんが、その抽象ということが、「イメージ」そのものなのではないでしょうか。

抽象的な「イメージ」を思考によって具体化していく

プロセスこそが、どんな種類の行為であっても、まとわりついてくる、宿命のように、行為というものにつきまとう、内側なものではないかと思うのです。

どんな行為にも必ず、その手前には「イメージ」というたまごみみたいなものがあるはずなのです。

でもそれがあまりにも、あたり前すぎて通りすぎたり、意識しなくても、あたり前のこととして気がつかないか、または、無視されてしまう、日常なのではないでしょうか。

くだらないことをクドクドと、なにを言いたいのだと思われるかもしれませんが、そのことはあたり前すぎて通り過ぎられて、無視されすぎて、あるいは観えずにしまっているのかもしれない。

こういうのは、哲学というのかもしれないですが、そんなのではなくて、あたり前をゆっくり見つめるだけのこのような気がします。

高杉君は（もう既に変わっているかもしれませんが）牧場で働いているといっていました。

その牧場で見た、牛のことや、牛の生活についてや、自分の絵画と自分の生活のことを見つめているのだと思



〈牧場の自由〉2019年 油彩・木製パネル 145.5×145.5cm

います。

ウシのうんこを掃除したり、おっぱいをお湯のタオルで拭いてきれいにしたり、搾乳機を付けてやったりする、牧場の仕事の労働をおして、自分の絵画の持っている「イメージ」性を一生懸命に確認しようとしているのではないかと、ギャラリー彩園子の部屋で感じています。ふつう、絵を描こうという人は、喰うために学校の先生になるのが多くて、それが無難なことだと思うのです。でも、先生と、絵描きはなじみが悪いこともあるはずで、そういうことは、そっと、筆箱にしまっただけで考えようということにします。

でもそれが、たび重なる日常になってしまっただけで、まして揚げ句には忘れてしまうことになりました。その結果、絵描きと先生の境目が滲んでしまっただけで、見えなくなっただけです。

別にそんなことはどうでもいいじゃん、絵を描き続けることができるのなら、という人もあるかもしれませんが、高杉君は絵描きの輪郭をはつきりさせていたのだと思います。

しかし、牧場で働きながら、ウシたちと見つめあひながら、ウシたちの価値や自分の「労働の価値」についても考えたんじゃないだろうか。

わたしは今、勝手な想像という「イメージ」をふくらませて、高杉君という人の絵画を通じて、自分の持っている「イメージ」の中で遊んでいるだけかもしれません。

高杉さんの今回の作品の中には、ウシのうんこが醜態しているようなのがあったり（P 19）、ウシの耳につける識別票みたいなもの（上）、体格の善いウシがてっぺんにあるような感じのもの（P 12・13）もありました。

ウシに囲まれて生活をしている間に、体重が500kg以上もある生物と、自分がキャンパスという1枚の布きれ（いや、ベニヤ板だったり、ボール紙かもしれない）に絵の具を塗って、それこそ「イメージ」という世界をそこに、つくりだそうとしたんだと思います。

でも、「イメージ」というものは作れば作るほど、向こうの方に向かってしまっただけで、労働の日々に、疲労という報酬の価値と、労働の「イメージ」にはさまれながら、結構充実した日々の中で、軽い疲労に酔っているのかもしれないなど、ヤッパリ勝手な想像を繰り返かえしていま



〈絵画の肥し〉2019年 油彩・木製パネル 153.2 × 110.5cm

す。

芸術が、たぶんですけど、「イメージ」という不思議な作用をなりわいのようなものを利用してながら、ホントはどうなんだろうと、首をかきげつつ、前に進む細い道を歩くことなのかもしれません。

「未来」という題の絵（p 15）はどこか双眼鏡で遠くを見ているような絵でした。

絵を2枚かさねて、上のをめぐりかけて、下の絵が見えかけているような作品もありました。

また、アンフォルメルのような漠然とした色を塗りかさねただけのものもあります。

「イメージ」が説明ではなく、「イメージ」そのものとして、痕跡をとどめようとしているのでしょうか。

「イメージ」つつうものは不思議だと思えます。

その迷路に、迷いながら歩くのも、また「イメージ」の世界かもしれません。

すべてに「イメージ」の力が働いているながら、その力にとられ続けているのですが、その正体がよくわからない、という状態の自分が綴っています。人の持っているだろう、それらの「イメージ」について語ったりする

のは、無免許運転みたいで、お巡りさんに捕まっちゃいそう。

でも、事故にはなっていないよな。そんなことはないか。事故になりにかからないくらいに、「イメージ」っていうのは難しいし、いったん事故を起こせば、間違った方向に行ってしまうって、正体はますます不明のままでしょう。わたしはこうして、わけのわからないような「イメージ」をもてあそんでいるけれど、それがどっちの方を向いているのかも見えず、暗闇を進んでいます。

（すがぬまろく 彫刻家）

高杉隆 略歴

- 1971 岩手県滝沢市在住
 - 1997 青森県八戸市生まれ
 - 2001 武蔵野美術大学短期大学部通信教育学部卒業。
 - 2012 岩手県美術選奨受賞
- 「明日の仕事12人」ギャラリー彩園子





〈田圃の天体〉 2006年 花巻市東和町



〈二つではなく、一つでもない〉 2019年 cygアートギャラリー

出町さんにタイトルのことを訊ねたら「暗喩です」と、
 いつてました。

意外なこたえに、少し驚きながら、もつと話をしたかったけれど、ここでも、話を進めることができず、わたしの想像で、進めます。

高杉君のことも同じように、イメージの謎に明かりすら、とますることができませんでした。人の想像力が、人に伝わる時には、かたちを変えるものだという気がするので、そこから始めたいと思います。

うんと卑近なことでいえば、「赤いリンゴ」ということばは、赤いリンゴのままのことばですが、赤いリンゴを示すために、もつと別のことばを使うことで、そのことばは、赤いリンゴとの差に想像を膨らませることができるとおもいます。

あたり前のことです。なにかを言い表したり、表現をしようとするときには、直接話法ではなく、いったん別のことに置き換えるなどして、間接的な話法が印象に残るのだとずつと思っています。それが「イメージ」ではないかとすら思います。

ニュースの原稿や、論文などでは間接話法ではなく、

じかにものを表さなくては、誤解や曲解を招きやすくなるので別です。

なにかの事実を主観的に表現しようとするれば、明喩ではなくて、暗喩的な表現は実に重要です。

人に伝わる時に、相手の中で、ことばや意味が醗酵したり、昇華することはいくらでもあります。その昇華や醗酵がとても重要で、醗酵することで、人の中に吸収されていくものだ、ずつと思っています。それが「イメージ」ではないかとすら思っています。

だけど、現代の表現では、といていいのか疑問ですが（最近はまだ違うようです）、「イメージ」というのは排除されて、事実を述べよ。みたいなことが、真実と事実の間で問題になっています。

もちろん、哲学が過去の論理を否定してさらに、真実に肉薄するなかで、なおのこと「イメージ」は事実ではなく、仮の空想にすぎない幻想ということになるのかもしれない。

そういうことが、戦後の美術の実存的な芸術、わたしの年代が体験してきたところでは、ポップ・アートやコンセプチュアル・アートなどに繋がったのだと思います。



〈辺境のサンタクロース〉 2009年 YGP 雫石



〈無題〉 2008年 ギャラリー彩園子

ことにコンセプチュアル・アートでは、哲学としてのものの存在の事実に対して、「イメージ」は事実を曇らせることなのかもしれません。

ひとりの想像力の中に、哲学の論理を、どのように入りこませて、哲学の解釈を展開できるか。ということが、作品の真実味と、品格にすらなりうる、条件なのかもしれない、と思います。

そして、ものと人間の間に、なにがあるのだろうか。想像や思考。想像が、架空の空間で死闘を繰り広げ、そのすき間に「想像の結晶」を成長させて、くさびのように世界を切り開くのが、現代美術のリング、プロボクシングのリングのように、ノックダウンをとったり、タオルを投げ込むようなことになったりするので。

もっとも相手は、他の作家ということではなく、自分の想像力ということです。

決して、現代的なスタイルなどではありません。

社会は哲学だけでできているわけでも、それこそ想像だけでもないことは当然です。

さらに、美術だけが想像でもないことはあたり前です。社会という膨大な要素の中のほんの一部分を、分け与

えられながら、美術を目指すものとして、自分の想像が矛盾しない社会の一部でありたいものです。

けれど、存在としては、あまりにもちっぽけで、サハラ砂漠の一粒の砂みたいな存在として、整然たる、存在への想像に挑むのは、あまりにも大胆か。と、ひるむ時もあります。想像とは砂が巨岩にも宇宙にすら、なりうるものなのです。

たとえ幻想であっても、想像が私たちの唯一の武器で、人足らしめる要素ならば、想像という剣を研ぎ澄まして、遊び尽くしたいものです。

でも、そこまでは誰にでも思うことができる、一般的な話です。実際に「想像を働かせて、その結果としてのものを作る」。自分たちには、「作るという現実」があつて、それが自分をさらに、自分足らしめている唯一の「現実」です。

それは非常な強みです。

作る人間と作らない人間の境目には、現実があります。作るといっても、芸術を、ではなくて、日々を作ることでです。

村上春樹も芸術は暗喩だ、といっていました。短編に、



〈空中散種〉 2019年 cygアートギャラリー



〈石神の天体〉 2006年 石神の丘美術館

消えた象の話があります。小さな町の動物園から、大きな象が忽然と姿を消したことを語っていました。ありえないようなかたちで、姿を消したことが、大きな謎を呼んで、その消え方を読む人も一緒に想像するので、もちろんわかりません。

そういう、ありえないような、おかしい話しをリアリティを持って語るファンタジーだと思います。

ありえないおかしな事実を隠し持っている、社会と現実。安易に信じなさんな、ということなのかなと思ったりします。そういううしろ側のことメタファーなのかと思います。

でも、それが暗喩だと云ってしまえばそれで終わりかなと思ったりします。

リアリティということも、次々とてきますけれど、またここで、手にも負えないくらい大きな話しになってしまいます。

そのリアリティのために、皆誰もが四苦八苦して、どこだ、あつちだこつちだと、頭の中で探し回ります。

その探し方というよりも、方向を見定めて、えいやつと剣を突き刺して、こぼれ出てくるものを観て感じるの

かもしれません。

いつだったか、将棋の羽生善治がいらっしゃいましたが、「何手、先まで読むのか」と訊かれますが、実際には直感です。その直感を育てるのは、日常の思考だと思えます」と。常日ごろの思考が、直感を深くして、勝負に勝つ。

それがリアリティなのかもしれないと思います。

結果オーライということでは、もちろんありません。

暗喩は相手の中で醗酵、分解して吸収されて別のものに変化をする。化学変化を起こすのだと思います。それがコミュニケーションではないかと強く思います。

だから、出町君が「暗喩です」といったのは、「明喩であり暗喩」でもあると思います、非常に強く響きました。

(すがぬまろく 彫刻家)

- 出町隼人 略歴
- 1978 青森生まれ
 - 2006 磁気状況 ギャラリー彩園子
 - 2009 ウラジオストーク・ピエンナーレ
 - 2016 種々葉業 国際芸術センター青森

そらごと 空言のようなホントの話し 3

水戸の春はホロ苦い

萬木 康博

水戸に住むようになって、ずいぶん経った。
数えてみると、ちょうど三一回目の春になろうとして
いるところだ。

私とその家族が現在住んでいる小さい家は、水戸市の
西の街はずれで、常磐自動車道と水戸インターが近い。
JR 水戸駅から八キロほどの距離がある。

三連番地の市街地と、四桁番地の「市街化調整区域」
のまさに境目で、我家は勿論その四桁番地側に位置して
いる。

東京では、六四年オリンピックには既に周りがすべて
住宅地になっていた環境に暮らしていたので、高い杉の
屋敷森に囲まれた古くからある家々と、その黒い森をつ
なぐように点在している雑木林や野菜畑が、近隣にある
環境への引越しは、私ばかりでなく、とりわけ家族に
とって大激変だった。

引越したのは、三月末のよく晴れた日だった。

借家だったが、大塚池という水戸では二番か三番目の
大ききの湖沼が目の前にあった。

トラックから降ろした荷物の始末もそこそこに、その
家の横にあった空き地へ出て、家族と精一杯に手足を伸

ばし、水戸の空気を吸い込んだ。

足元に視線を落としたとき、東京では見たことがないほどたくさん土筆が、顔を出していた。

子どもと一緒にあって、それをたくさん採った。我妻は山間地の生まれだから、そんなものは珍しくもなんともないし、「今は荷物の片付けが先でしょ！」と考える現実主義者だが、その日の夕飯に、土筆を御浸しにしておかずの一品に副えてくれた。

子どもたちの夢を壊さないように…、という気遣いだったのだろう。ホロ苦い味の記憶が、微かに残る。

これが水戸で最初の日のことだった。

冬が近づいて、うちの子どもたちが目を輝かせる出来事が、目の前の大塚池に発生した。

ハクチョウが何羽も飛来するようになったのだ。

大塚池は、水戸駅近くの千波湖に比べて水深が浅く、水底に棲む生き物を捕食することができ、しかも夜の灯りが周辺に多い千波湖と違って、街はずれらしい静かな闇に包まれる。ハクチョウが毎年やって来る、好ましい条件の飛来地であることを知った。日を追って、飛来す

る数が増えていった。

冬の使者としてハクチョウが、への字に編隊を組んで頭の上を去来するなどということが、日常の景色になるとは、子どもたちばかりでなく、親の二人も考えたことがなかった。

飛びながら、「コーウ、コーウ、」と甲高いとも、野太いとも言える、文字にしにくい鳴き声を交わしながら、ゆっくり羽ばたいて飛行する。着水するとき、両脚の水掻きを飛行艇の波消しフロートのように斜めにして、巧みに制動を効かせるのだ。

冬が深まるにつれて、その数は百羽近くにまで達していたのではなかったか。

ところが、冬が本格化するにつれて、朝夕の冷え込みが半端ないことを知らされた。しかもその家は、数寄屋造りを気取っていたから、土壁と柱の間などに外の陽射しが見えるほどの隙間があつて、風の強い日には口笛のような音があちこちから聞こえる始末だ。

子どもたちが初めての水戸の冬を越せるかと心配した妻が、近くで新築中の建売住宅を見つけてきた。池の傍

の家からは五〇〇メートル西で、水戸インターが近くなった。池の傍よりさらに街はずれになったが、一年もたない引越しを決断したもう一つの大きな理由が、子どもたちの通う学校を変えずに済むことだった。

東京の区立小学校から、水戸の準農村部にある市立小学校への転校を、親の都合で強いたので、また学校を変えなければならないようなことだけは、避けたかった。

見つけてきた新しい家も同じ学校区で、番地の四桁数字が変わるだけだし、通学距離もほぼ同じだったから、妻に同意して即決した。これが最初に書いた「私たちが住んでいる小さい家」である。

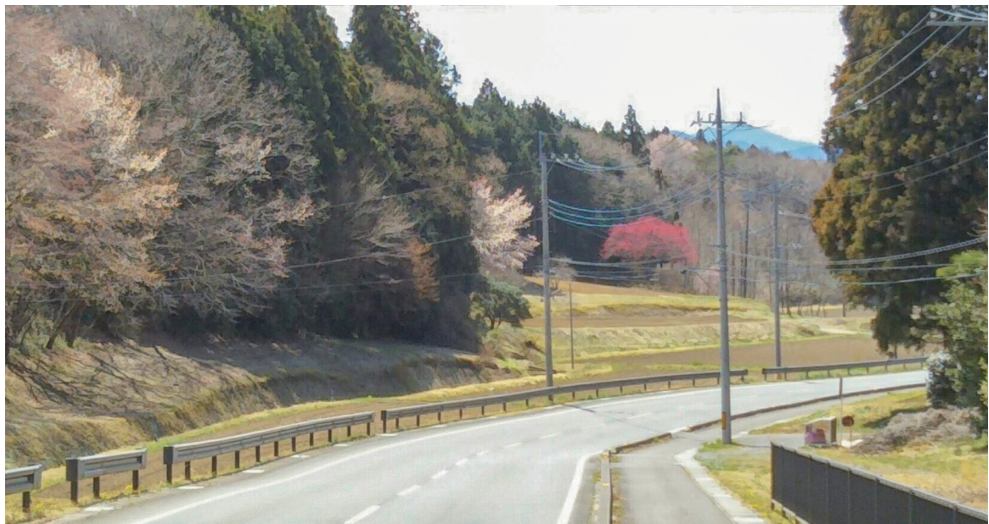
街はずれの冬の朝は、マイナス五℃前後も珍しくはない。しかしこうなると、むしろ元気になっているように見えるのがハクチョウたちだ。

大塚池から少し離れた場所なのに、鳴き声は充分に聞こえてくるし、頭上の編隊飛行も高度が少し高いくらいで、間近に見える。そして三月半ばを過ぎるころ、五羽とか七羽とかのなかまが編隊を組んで、北に帰って行く。

こうして毎年、我家の周りから冬が去って行き、二ヶ月後半から咲きはじめる梅が先導者となって、水戸の



首筋に灰色の羽毛が残るのは、まだ幼鳥だ



春が静かに始まる。

東京に住んでいたときと大きく流儀を変えなければならぬことに、すぐ気付いたのは、「現実主義者」の妻だった。車なしでは暮らせないのだ。彼女は、三ヶ月後には免許を取得して、家族の一員に車が加わった。

だが、私のほうは、教習所に通う時間をどうしても作れなかったし、車を運転できるようになるなどという大革命を遂げるには、「保守主義者」過ぎた。

それともう一つ、私には「自転車」という隠れた伴侶があったからだ。高校二年の夏に敢行した、信州からの一週間の自転車無銭旅行が原点にある。

常勤の仕事を退職してから、縁あって週に何回か通うことになった笠間は、丸三年で終止符を打った。しかし、通う必要がなくなった直後にあの大地震が発生し、OBとして手伝いに駆けつけた。この時こそ自転車だった。

一四〜五キロあって、六〇分前後かかるが、震災直後で通行車両が少なかったとはいえ、幹線の国道五〇号は路側が狭く危険だった。何回か応援に行きながら、安全で走りやすい裏道を幾つか試走して、「驚くほど安全

なルートを見つけた。いわゆる「広域農道」などと称する類のよく整備された道で、滅多に車と遭遇することが無い。この道で、峠にあたる場所から東南方向に見える風景が、拙文のタイトル頁の見開き写真だ。昨年四月の晴れた日だった。水戸と笠間の境界から笠間側に数キロ進んだ辺りで、ここから緩やかに下っていくと、水田や栗の木畑などが営まれている。

赤茶色の若葉と淡いピンクの花が同時に開く山桜の奥に、紅色のハナモモの樹が田圃のあぜ道の脇に傘を広げていた。間もなく田に水を引き、四月の末から田植えが始まる。街はずれは、季節の移ろいが顕著で美しい。

一九八一年の春、雑誌『美術手帖』編集部の大橋さんから〈展評〉担当を依頼された。しかし、上野の東京都美学芸員だった私は、その年の秋の大事な企画展を準備することになっていたので、その期間だけは別の人に担当してもらおうようお願いし、とにかく画廊の個展などを視て歩くようになった。

菅沼緑さんの個展を最初に訪ねたのは、神田のときわ画廊だった。全ての作品発表をフォローできた訳ではな



峠の路肩に群生するタチツボスミレ

かったが、制作に誠実な姿勢が滲み出ていた。その緑さんが、東和町で七年前から築き上げてきた『まちてくギャラリー』という舞台で、最後の三回に「舞い人」として共同作業ができたことは、心底から嬉しい。

(ゆるぎやすひる 美術批評家、写真も)

@つちざわ抄

岡部昌生



猿館酒店二階の出窓を擦り取る

©菅沼 緑



村上善男「萬鐵五郎を辿って」

荷札つけて、元払いのチツキで帰すから きつと来て
ください。

1993年、札幌のテンポラリススペースの中森敏夫さんとわたしが企画した展示#024村上善男展「鯨ヶ澤・帯緋衣の漂着」(テキスト 佐藤友哉「見立て」というアッサンブラージュ)を見届け、弘前にむかう美術家村上善男さんのことが深く印象に残っています。

こんな古いことを思い起こして、春の東北をめざして
いました。ひよつとして会えるかもしれない。会いたい
なとも思いました。

朝日晃さんが札幌の北海学園大学で教鞭をとっていた
とき、二人を招聘した特別講義を開講してくださいました。
村上善男さんは、北海道立文学館のお仕事もかねてのこ
とでしたが、岩手軽便鉄道と宮澤賢治の銀河ステーション
を交えた東北気圏、東北考を練達の話術で話されてい
た、その記憶が蘇る。それ以来のことでしたから。

①「街かど美術館 2006」アート@つちざわ(土澤)
薄桃色に煙った高い空の土澤。町中に溢れるように咲

き誇る桜の光景は、北海道にない絢爛さ、土澤の大きな
風景に抱かれるような春爛漫でした。「鉄人会の萬鉄五
郎祭」のあと、桜の樹の下での交流会はまさに春宵一刻
値千金の宴でした。5月4日、東北の、村上善男さんふ
うにいえばこの気圏を体感しながら通り抜けたく、釜
石線を乗り継いで土澤を離れました。丁度その頃、村上
善男さんが逝ったことを何日かあとの新聞報道で知りま
した。何とも無念な、わたしの東北行きでした。

菅沼緑さんに誘われ、「アート@つちざわ」の土澤に
触れたく、桜咲く時期にやってきました。しかし、土澤
を知らない私は、村上善男さんの「萬鐵五郎を辿って」
を携えて町を巡り、土澤のかたちを擦りはじめました。
わたしを導いてくれた一冊でした。

さらに、夏のワークショップでは、「村上善男『萬鐵
五郎を辿って』を携えて」という少し長い、けれど、と
てもわかりやすい主題を進めることを構想していました。

赤と緑のオイルチョークで、土澤の町を巡りながら、
町のかたち町の間、人々の生活の痕跡や記憶に触れて
取り出していくというアートの作業です。



街の人たちによって擦りとられた街のかたちが旧東和町議場につり下げられた ©菅沼 緑



萬鐵五郎記念美術館の八丁土蔵に展示された、街のかたちのフロッターージュ ©菅沼 緑

のスケールのことは考えていないだろうなと思いました。人が生きる、住む、暮らす。「自分の街なんだ」というように思える、見えるようなスケールを考えているんだと思います。大きくなく、程よい大きさの街に住んでいる人たちが何かしたいと行動するときに、「活き活き」というのは、住んでいる人たちの気持ちをつなげる程よいエリア、風景、光景といえますか、それがあのだと感じました。

ここで何が出来るのかと考えたとき、「@つちざわマトリクス」という土澤で「つちざわに触れる」ワークショップ、土澤の中にたくさん埋め込まれ受け継がれてきた縄文、民俗のかたち、その力、出来ごと、生活、記憶というものが土澤の街に潜んでいる。そういう大きな器をマトリクス(母型)と意味づけ「@つちざわマトリクス」を提案しました。

「土澤のかたち」を掘り起こし、擦りとつてくれました。先程議場に…と声がありました、旧東和町議場に、あんなふうな街の人たちが参加することがあれば、と思いを吊りました。あそこにある赤と緑によって取り出された700点もの「土澤のかたち」は、嬉しそうな感じ

二色のチョークは、「剥き出された赤土 対 桑園に燃える緑…」と、村上善男さんのこの本の帯に記されたことばから触発されましたが、土澤の赤土と新緑の艶やかで鮮やかな対比の光景とも重なり、萬鉄五郎と村上善男のふたつの才能にも触れることでした。

@

北海道は今、桜の開花を北へ、北へと動きながら、その桜だよりを拡げています。わたる風にはまだ冷たさがありますが、エゾヤマザクラから根室のチシマザクラの開花に合わせるように、村上善男さんを思う旅になっていました。(2006年5月18日)

@

(平澤広さんからベネチアアヒエンナレの作家に決まったことが紹介され、大きな拍手をいただいた) 5月に初めて土澤に来ました。8月に皆さんと汗かいてワークショップをして、その後、みなさんにすべてを委せて…。その委せた結果を見届けに今日きました。

先程、このシンポジウムの冒頭、「街かど美術館」を支えてくれた菅沼緑さんが「街をいきいき」「街がいきいき」と話してました。街のイメージ、あまり大きな街



土澤駅旧引き込み線の枕木を擦り取る

© ANZAI



萬鐵五郎記念美術館前広場のレンガを擦り取るワークショップ

©菅沼 緑

で揺れているんですね。擦り取った人たちの気持ちも「土澤のかたち」に呼応するように思えました。

@

美術による街づくりというのは、先程、浜田剛爾さんから、「地域の中にある美術館が街の人と地域をどのように考えていくのか」というその考え方、ひとつの試みというものが街づくりの中に大きな影響を与えていくんだらうと思うんです。他の街の方法論とは違う、美術館が地域の問題を挑むようにしてつくりあげ、掘り起こす。その新しい価値の提示というものが一つの発想にながってくる。街づくりにアートが直接参加するようにはなかなか思えないのですが、街の人たちと汗かいてマチに触れる、地域に向ける眼差しのひとつの試みというものが、アートによって気づかされる。そういう役割の自覚というものが、多分アーティストのなかにもあって、マチの人々と一緒に美術のなかにある力によって、うまく引きだされるような「街かど美術館」。次への提案の方向と言えるのではないかと、そのように思っています。(2006年11月4日「美術で街が活き活き」街かど美術館アート@土澤シンポジウム記録から)

@

土澤のみなさんが生活している場所、地域の方々と美術によってどんなことができるのかを考えながら提案しました。わたしの参加は、土澤の街の歴史や生活の痕跡に触れながら、ワークショップというかたちで共にフロッタージュしながら地域へ向ける眼差しのひとつとして、アートすることを共有することでした。

8月に土澤の人々と行い、この体験から10月の「アート@つちざわ〈土澤〉」にむけ、サポーター「5454(ゴシゴシ)アート@つちざわ隊」が、街の人やここを訪れた人々と広めていく、受け身ではなくどんどん皆を引っ張っていく積極的な活動が、「アート@つちざわ(土澤)」らしい活動となりました。「ふるさと歴史郷土資料館」の縄文土器や民具、鎗八幡神社、土澤駅引き込み線の枕木に打ち込まれた保線釘の符号、萬鐵五郎美術館前庭や木版画「ねて居る人」が刻まれた碑、東和町内の園児と先生たちが「ゴシゴシ隊ひよこ組」となって幼稚園や保育園を擦り取る。まちなかの民家や酒蔵の倉庫の通路に入って沢山の生活と歴史の痕跡に触れる手応え。ここで制作され展示された10畳もの布にとどめられた



@つちざわ〈土澤〉の参加者（八幡）

© ANZAI



猿舘酒店通路の床を擦りとる

© ANZAI

「@つちざわ」は、「旧町議会議場や集会センター吹き抜きのガラス窓」が、巨大な「@つちざわステンドグラス」になりましたし、猿舘酒店通路や日本酒の棚、きのこやおいよのベニヤ壁、八丁土蔵の白壁などに展示された1500点。その紙片に擦りとられた土澤の断片が、人の気配や風の動きに揺れたり動いたり、まさに記憶を揺さぶり掘りおこされた賑やかな展示となったことです。

@

「この展覧会、あの展覧会、もう一度みたいになっていふふうに見える展覧会はよい展覧会だって、ボクは思っていますって言ったのね。それって結構すごい大事なことだとも思っているんですけど…。だから、この東和町の展覧会が、もう一度観てみたいになってことになるんじゃないかっていう部分が何処かにあれば、それは良い展覧会ってことになるんじゃないかな、っていうふうに思います」。

シンポジウム「地方発アートと地域のあり方」の安齋重男さんのことばに重ねています。

@

足元を掘る。そうか、ここは縄文発掘の盛んな土地だっ

たから、二本のチョークと紙で、街に触れるというシンブルでストレートな手法で掘り起こすことが、すんなりこなしてゆく下地があったんだ。手から伝わる歴史の現場。膨大な紙片のプリントワーク「@つちざわマトリクス」だったが、むしろ、それぞれの身体にはいり込み刻まれ記憶されるプリントアートともいえた。

（@つちざわマトリクス2006 土澤の懐にもぐれば、ツチザワガカラダニハイッテキタ）

@

この時の展示会場となった土澤商店街の一本道は、今もこの町でアートを抱えて息づいている。「今日もそこにある美術の眺め」と『まちてくギャラリー』に紹介され、「街かど美術館アート@つちざわ（土澤）」につながっている。まちの人が支えた現代美術の現場がここにある。

（おかべまさお 美術家）

作家プロフィール

フロッタージュ技法を用い、痕跡から記憶を立ち上げる驚異的作品で知られる。ベネチアビエンナーレやあいちトリエンナーレをはじめ、内外の国際展に参加しながら、現在も精力的に活動している。（港千尋 写真家・著述家）

小さな美術館の大きな望み

中村 光紀



萬鉄五郎記念美術館が、平成元年度の「地域創造大賞（総務大臣賞）」を受賞しました。表彰式が1月17日、東京都千代田区のホテル「グランドアーク半蔵門」で行われ、藤原忠雄副市長と出席しました。「地域創造」とは総務省が主導して1994（平成6）年、地域の文化振興を促進するため、全国の自治体などにより作られた一般財団法人です。同賞は平成16年に創設され、地域における創造的文化的活動の功績が著しい公立文化施設に贈られます。今回選ばれたのは全国の公立文化施設7館で、そのうち美術館は当館と神奈川県立近代美術館、塩竈市立杉村惇美術館の3館で、あとはホールなどの複合文化施設です。なにより神奈川近美と一緒に受賞できたのが嬉しいことで、水沢勉館長は萬などの日本近代美術の研究者で、一昨年の「没後90年萬鉄五郎展」では一緒に展覧会構成をしました。同館は戦後初の公立近代美術館で、積極的に企画展を展開し、昭和37年開催の「萬鉄五郎展」は、萬の公立美術館で初めての展覧会となり、その評価を高める原点となった。土方定一館長、陰里鉄郎学芸員の時代です。

受賞施設は、全国の地方公共団体から応募があった中

から、専門家で構成する審査委員会（田村孝子委員長ら8名）が審査した。実は当館が応募していなかったら、審査委員の方からは非応募書類を出すようにと促されて出した次第だった。開館35年を迎えた当館は、旧東和町の町民運動によって誕生した経緯があり、近代美術の先駆者としての萬を、長年にわたって研究と顕彰を進めてきました。同時に、地元商店街と住民とも連携して「街かど美術館」を10年にわたって開催し、全国的にもユニークな美術館として注目されました。また、「アート&クラフト・フェア」にも取り組み、現在出展者が300軒を超えており、春と秋に2日間ずつの会期で開催、来場者が5万人を超える盛況で商店街が賑わい、地域連携のイベントに定着しました。

なお、この冊子が終刊を迎えるという。えっ！と緑さんに質したら、「他人の仕事の紹介ばかりをしていると、どうも自分の仕事ができない」とのことだった。7年間にわたって現代美術を紹介できたのは、彼の豊富な人脈があったことである。これから大いに制作し作品を世に問うて欲しいと思います。多謝！

（なかむら みつり 萬鉄五郎記念美術館館長）

編集後記

何をしても、進行して行くうちにその姿は変わってゆきます。この小冊子にしても全く同じです。

画廊にはいると、入り口辺りにたくさんの案内状が貼られていて、小さな葉書でもそれぞれの思いが伝わってくる場合があります。それを見て、この町なかを画廊の入り口のようにしようと思いました。さらに、なんらかの記録も作ろうと考えて、インクジェットでプリントして中綴じホッチキスで製本するところから始めました。それがだんだん部数も増え、市からの補助もあって、1500部まで伸びましたが、自身の力が尽きました。前号で、年4回を減らさないと見栄を張りましたが、舌の根も乾かないうちの、撤回で情けありませんが、どうにも仕方がありません。

今回の号で、終刊です。

まちの中の展示は続けられると思います。

全部で25ヶ所ほどの展示で60枚くらいの写真で続けるつもりです。

その様子はフェイスブックなどであげることになると思っています。(アカウントは菅沼緑で検索してください)

